

# 持続可能な地方創生型人材育成

早稲田大学 人間科学学術院

扇原 淳, 西村昭治, 金群

## 1. シンポジウム開催の背景

早稲田大学人間科学学術院と埼玉県秩父郡皆野町は、2019年に包括連携協定（「埼玉県皆野町と早稲田大学人間科学学術院との地域活性化プロジェクトに関する協定書」）を締結し、教育プログラムの開発および地域・政策課題に関する研究支援を進めてきた。この連携のもと、地方創生インターンシッププログラムが制定され、人間科学部・大学院人間科学研究科の学生が毎年参加し、地域の課題を実践的に学びながら、地方創生に関する知見を深めている。

また、インターンシップ事業と関連して、県立皆野高校の魅力化をテーマにした活動が行われ、卒業生の中には皆野町地域おこし協力隊として町の国際化や地域振興に取り組む者もいる。こうした取り組みは、単なる短期的な学習にとどまらず、持続可能な地方創生の実現に向けた人材育成の試行として展開されてきた。

2021年には、町民や幼稚園・小中学校の児童生徒、教職員を対象としたインタビュー調査を実施し、皆野町の教育政策に寄与する協力を行った。その後、皆野町教育委員会は、地域への愛着を育み、地域とのつながりを重視した「ふるさと教育」として、「みんなの学」の構想を進めている。この取り組みでは、幼稚園から小・中学校までのカリキュラムを体系的に整備し、町の歴史や文化、産業を学ぶ機会を創出している。

実際に、町内の学校では、秩父音頭や獅子舞などの伝統文化を地域の方から学ぶ活動や、農業体験を通じたふるさと学習が実施されている。さらに2023年度からは「SDGsの実現に向けた教育推進事業」に取り組み、住み続けられるまちづくりをテーマに研究を推進している。こうした実践を支えるためには、教育機関のみならず、地域住民や行政、さらには外部の専門家や大学との連携が不可欠である。

このような背景を踏まえ、本年度の皆野教育シンポジウムでは、地域と協働しながら持続可能な人材育成を実現するための具体的な方策を議論した。特に、皆野町教育委員会との連携を強化し、「みんなの学」を軸にしたふるさと教育の発展可能性を探るとともに、教師、地域住民、行政、民間企業、大学が一体となり、どのようにして次世代の地方創生を担う人材を育成していくかを議論した。また、学内外の研究者や実践家を交え、教育の枠を超えた広い視点から、地域社会と連携した学びのあり方について対話を深めた。

## 2. 開催概要

日 時：2024年12月20日（金）13：30～16：45

会 場：皆野町立皆野中学校

主 催：早稲田大学人間総合研究センター

共 催：皆野町教育委員会

参加者数：146名

内訳：皆野町立皆野中学校 93名（第3学年生徒87名，教員16名）  
中学校学校運営協議会委員 3名  
皆野町教育委員会 3名  
皆野町役場 11名（町長，副町長，企画財政課，産業観光課，  
健康こども課，町民生活課，福祉課）  
皆野町議会 1名  
埼玉教育局 4名  
株式会社東洋精工 1名  
株式会社上武 1名  
埼玉りそな銀行 1名  
地域おこし協力隊 1名  
皆野町立皆野小学校 1名  
皆野町立三沢小学校 1名  
埼玉県立皆野高等学校 11名（生徒9名，教員2名）  
早稲田大学人間科学学術院 13名（学生・大学院生11名，教員2名）

内 容：

第1部：公開授業

- (1) 講演：埼玉県高等学校生徒商業研究発表大会優秀賞プレゼン発表  
「統合に向けた人数減少をみんなで乗り越えろ！」  
埼玉県立皆野高等学校生徒：青野未空，小池誉比人，柊原迅将，葭田水晶，横田雄大，片山惣，齋藤涼玖，作田渚，高橋凜
- (2) グループディスカッション・全体発表
- (3) 指導講評：西村昭治 早稲田大学人間科学学術院教授  
扇原 淳 早稲田大学人間科学学術院教授

第2部：「持続可能な地方創生型人材育成」を考える会

- (1) 公開授業についてのディスカッション
- (2) 意見交換

### 3. シンポジウム概要

第1部：公開授業

- (1) プレゼン発表「統合に向けた人数減少をみんなで乗り越えろ！」

埼玉県立皆野高等学校生徒

皆野高校は令和8年度に秩父高校との統合を控え，生徒募集の停止により生徒・教職員の減少という課題に直面している。これに伴い，体育祭や文化祭の規模縮小，人手不足，部活動の活動機会の減少が懸念されている。また，行事運営

の効率化や資金確保も求められている。こうした課題に対応するため、生徒主体の研究活動を通じ、地域社会との連携を深めながら、持続可能な地方創生型の人材育成に取り組んでいる。



図1 当日発表の様子

その一環として、「統合に向けた人数減少を、みんなで乗り越えろ！」をテーマに掲げ、「人数が減少する中でも、授業で学んだ知識やスキルを活かした宣伝や運営を行えば、これまで以上に学校行事を盛り上げることができる」という仮説を立てた。この仮説を検証するために、文化祭の宣伝を強化し来場者を増やすこと、地元住民との関係を深め地域との結びつきを強化すること、卒業生やPTA、地域企業と協力し行事の運営体制を維持することを目標として設定した。

また、昨年度から遊休農地を活用し、原材料の栽培から加工・販売までを一貫して行う「6次産業プロジェクト」を展開し、「なんちゃって!?みそぼてサブレ」を開発、15ヶ所で800個以上を販売した。さらに、地域企業との連携を通じて「関係人口」の増加を目指し、地域の魅力発信にも貢献した。

文化祭の来場者拡大に向け、秩父音頭まつりや各種イベントで積極的なPRを実施し、OBやPTA、地域住民の協力を得ながら運営体制を強化した。こうした取り組みの結果、文化祭の来場者は前年の250人から500人へと倍増し、行事の盛り上がりも向上した。また、仮説のとおり、適切な宣伝や地域との協力によって少人数でも行事を成功させることが可能であることが示された。今後は、さらに地域との協働を深め、長期的な視点での地方創生に取り組んでいく。

## はじめに

これまでの活動のコンセプト

### ビジネスの力で地域課題の解決に貢献



図2 皆野高校で開発した商品（発表資料より抜粋）

#### (2) グループディスカッション・全体発表

皆野中学校3年生が、事前学習を含め約半年にわたり、「住み続けられるまちづくりのために」をテーマとして考えて提案を行った。約6名1組、合計15班となり、以下の課題について考えた。

- 1) 「住む」：住み良いまちづくり
  - ・ 行政：税金の使われ方，子育て支援，少子化対策
  - ・ 福祉：ボランティア，高齢者の健康づくり，障がい者福祉
- 2) 「楽しむ」
  - ・ 観光：観光資源
  - ・ 行事：秩父音頭祭り，皆野フォトフィールドディング，親鼻八坂祭り，ふれあい祭り，トレイルラン，皆野横丁，ワークショップ
- 3) 「守る」
  - ・ 伝統：祭り，伝統芸能
  - ・ 産業：林業，地形や自然の利用
- 4) 「育てる」
  - ・ 教育：幼児教育，学校教育，ふるさと教育
- 5) 「目指す」
  - ・ 環境：空き家，土地の有効利用，ゴミ問題
  - ・ 産業：働く場所づくり，IT産業
  - ・ 情報発信
  - ・ インフラストラクチャー：交通，町内設備整備



図3 当日発表の様子

生徒たちの提案は、事前調査をもとに課題を設定し、具体的な解決策を考えるというプロセスを経て発表された。その中には、子ども食堂の認知度向上や、地域図書館を多世代交流の場とするなど、地域社会と密接に関わる実践的な提案が含まれていた。

生徒たちはこの提案をさらにまとめ、提言集を2月に生徒会代表が町長に渡し、意見交換を行なった。若い世代が地域の課題に真剣に向き合い、解決策を考える姿勢は、地域の持続的な発展に向けた貴重な取り組みであり、今後の政策形成にも活かされることが期待される。



図4 生徒会代表が町長に提言集を贈呈

## 第2部：「持続可能な地方創生型人材育成」を考える会

第2部では、教育関係者、行政関係者及び早稲田大学の教員と学生が、皆野町の地域活性化とふるさと教育のあり方について意見を交わした。特に、中学生が地域課題を調査し、解決策を提案するプロセスや、それを支える大学生や行政の役割が重要なポイントとなった。

板倉校長は、中学生が話を聞くだけでなく、表現しプレゼンする力を持っていることを評価し、こうした経験の意義を強調した。新井教育長も、地域の企業や役場とのつながりを深めることが、地域貢献の意識の向上につながると述べた。行政関係者からは、中学生の提案が「町を日本一にする」といった意欲的なものだったが、より現実的な視点も必要だという指摘があった。また、発表の際には「何人に調査したのか」といった具体的なデータを入れることや、課題のデメリットをどう克服するかも考えるべきだと助言された。

中学生たちは、空き家問題やスポーツ施設の活用、高齢者向けの施策など、地域の課題に積極的に取り組み、役場と連携する重要性を学んだ。大学生も、調査手法やデータ収集の重要性を指導し、より具体的な提案につなげた。

最後に、新井教育長は、今回の議論が「みならの学」の実現に向けた一歩であると評価し、地域住民や行政と連携する学びの重要性を強調した。シンポジウムを通じて、中学生が自ら課題を発見し、解決策を提案する経験を積めたことは、今後の成長につながる重要な成果となった。今後は、この学びを実際の教育プログラムや地域政策に活かしていくことが求められる。

#### 4. アンケート結果

##### 公開授業について

- ・ 短い時間でしたが、皆野町の中学生が自分たちの住む街をどのように捉え、何を課題に感じているかという現場のリアルな意見を知る非常に有意義な時間でした。個人的には、学生が本課題に取り組む際の「一人称意識」を統一できると、よりよい時間になると考えました。「生徒一人一人が『皆野中学校の一員として、住み続けたい街を作るためのアイデアの一次情報を圧倒的に握っている』という、中学生だからこそ持つ視点を大切に、プレゼンに盛り込むと、相互にとってよりよい時間になるのではないのでしょうか。
- ・ 中学生が意見交換の際に、とても真剣な表情で話を聞いていたのが印象に残りました。地域の若者が、地域のことを考えるきっかけや機会を作ることは、学校の一つの役割であると、再認識することができました。
- ・ 設定されたテーブルについて、意見などを聞き、今の中学生はすごいと感じました。僕たちと年があまり変わらないのにここまで現実的に考えていて、すごいと感じたし、これから自分たちにもできることはないかと思いました。学校でいろいろな人と関わることは、なかなかないので、自分もよい機会になりました。

ありがとうございました。

- ・ 私の担当したグループの生徒の皆さんは、素直な意見をたくさん出していただいて職員としても大変勉強になりました。またディスカッションでアドバイスしたことをグループ発表までの短い時間内で修正、改善した。よい発表だったと思います。このような機会を通して、若い学生さんたちがどんなことを考えているのか、また、若い子ならではのアイデアは大変参考になりました。たくさん交流が生まれてぜひ今後も続けていただきたいシンポジウムだと思います。
- ・ 中高生たちのプレゼン作りと発表レベルが高い。面白い。中学生のプレゼンから皆野町を知ることが多くあった。勉強になりました。中高生だけでなく、大人も何か発表するとよい。ただ交流するより、大人が楽しそうに真剣に町について意見やアイデア出しをするところを見せたい。PLAN→ACTION, 小さくてもよいので、中学生のアイデアを実現させたい。地域おこし協力隊主催の「みな FES」がプレゼンに出てきてうれしかったです。
- ・ 子供たちが考えるテーマに広がりがあり、昨年度からのレベルアップが感じられました。継続は力なりと言うことで、この取組を進めていくことで地域の課題について真剣に考え、その対策を幅広く思考できる力がついていくと思います。皆中の特色としてブラッシュアップして行ってほしいと思いました。
- ・ 自分たちが考え（調べ）、発表（言語化）することでより自分事として町の問題をとらえていると思いました。もっと自由な発想で、お金、環境のことは抜きにして、どんどん発想できる空気づくりと言葉学びが重要だと感じました。
- ・ 中学生の皆さんの提案が素直にとっても嬉しかったです。子ども食堂にも、たくさん興味を示してもらい、中学生ボランティアとしての活用を含め、これからより発展させていけたらと改めて感じました。

#### **サブテーマの「持続可能な地方創生型人材育成」についてのご意見やご提案**

- ・ 各班一人一人ではアイデアとしてはよいがそこ止まり。すべての意見をまとめれば、実現可能な案に生まれ変わると思う。子育て世代（特に若い世代）は、経済不安定のため、出生率にも影響が出る。無いわけではないが足りない。教育に関しては、教員の質の向上というものが含まれておらず、よりよい教育のために、人材と場の提供に努めてほしい。
- ・ 人口が減少していく中で、どのようなことをすれば人口が増えていくかを様々な年齢の方々と話すことで、解決に向かうのではないかと考えました。そのような話の場を作っていくことも大切なのではないかと思います。
- ・ 地元の子たちが地元のことを考え、愛着を持つことも大事だ。持続型の地方創生につながると感じています。
- ・ 中高生での思い出、記憶というのは一生残るもので、人生に影響すると考えます。若い世代が町外に出ていくのはよいことで、外で様々な経験をして、地元と比較できるようになり、町のよいところ、直すべきところが浮き彫りになりま

す。そういった若者が後にUターンするためには、小中高で学校以外にも地域とつながり、考え動くことが肝要です。具体的にみなFESで出店やボランティアに参加する、シンポジウムの授業版を毎月実施し進めていくなど、地域の大人と、ともに町を作っていくこと、面白くしていくこと、自分事にしていくことが「私たちの町」というマインドになると思います。面白かったです。また呼んでください。

- ・ 企画力という点ではよい提案が多かったと思います。次は大人の力によっていかに実現できるかだと思います。夢だけに終わらせずに実現するアイデアが多くなればやる気のある人材育成や地域を愛する心がより一層大きくなると思います。
- ・ 生徒自身、自分が住む皆野町を知るよい機会だったと思います。そのことが皆野町の発展につながっていくと思います。
- ・ 中学生の提案が、町長の元まで届くことでモチベーションにつながる有効な手法だと感じました。
- ・ 学生自身の地域に対する理解を深め、誇りを持つことができるようにすることが重要です。また、自治体や企業、大学が連携し、共同で教育プログラムを開発することが重要です。
- ・ 地域の方々と、町に住む方々の協力が重要。地域の方のサポートも大事。
- ・ 今ある小学校が3校、中学校が1校という事実には衝撃を受けました。今いる子供たちが次なる担い手となるような活動がとても重要だと思いました。

### 皆野中学校生徒の感想

- ・ まるで私たちが議会に参加しているようで楽しかったです。
- ・ 話し合いで出た意見に対して、さらにこうした方が良くなるという案を出して学びを深めることができました。
- ・ 提案だけでなくスライドの作り方もご指導いただけて、これからも役立てたいと強く思いました。
- ・ 自分たちが思いもつかないような考えを大学生に言ってもらったので良い経験になりました。

## 5. 終わりに

本シンポジウムを通じて、皆野町における「みならの学」の可能性や、地域と教育が連携する意義について多くの意見が交わされた。中学生が自ら課題を発見し、解決策を考える過程は、地域への理解を深める貴重な機会となり、また、大学生や行政関係者との対話を通じて、より実践的な学びへとつながった。

皆野町では、これまでの教育連携を基盤に、地域住民や行政が一体となって子どもたちを育てる仕組みづくりが進められている。本シンポジウムでの議論を踏まえ、「みならの学」の実現に向けたさらなる取り組みが期待される。今後も、地域と学校が協力して

取り組む、持続可能な地域づくりにつながる教育モデルの推進と検証が重要である。